

飛耳長目

通巻158号 平成29年1月1日発行

「修身教授録」探求（第二百二十二回）

旧師の事ども（その1）

森信三

今日はいくつでしたかしら……。と先生題目の番号を尋ねられ、「ああもうそうでしたかなあ」と言われながら題目を板書せられる。

さて私の授業ももう余すところほんの僅かになりましたので、今日から3、4回にわたって、私が小学校時代から今日まで教えを受けた先生方のうち、特に私の心の中に残っている方々についての思い出話をしてみましょう。こういう事は、今日のような型にはまった学校修身では全く為されないことではありますが、しかし私どもにとついても心に残る話というものは、多くはこの種の話でありまして、それをお茶でもいただきますながら先生から承ったものが多いのであります。ただここにお茶の用意はできませんが、しかし大体そんなつもりで聞いていただきたいのです。

■松井立身先生

さてこういう意味でまず最初に私の心に浮かんで来るのは松井立身先生のことです。この方には小学校の尋常一、二年の2年間教わったのでありますが、私の学校生活のそもその始めがこの松井先生によって教えられたという事は、今にして考えてみまして、実に辱いことと思うのであります。

先生は三河の刈谷藩の武士であつて、あの天誅組で名高い松本 奎堂（けいどう）先生などの後輩にあたる方です。そこで奎堂先生についても確か一、二度はお聞きしたように思います。何しろ尋常一、二年の頃のことですから、それ

がどういうことであつたかはつきりとは残っていません。さてこの松井先生はお生まれのせいもありましようが、非常に上品な方であつた上に、またなかなか優しい方でもありました。尋常の一、二年生を受け持たれたのも、あるいはそのせいかもしれませぬ。

かく先生はそのお人柄として実に珍しくお立派な方でありましたが、しかし先生の教師としての資格は、師範学校を出ていられたかつたために、甚だ低いものでありまして、永い間代用教員でお勤めになり、ついで准教員におなりになってからも、相当その期間が長く、後に尋常科正教員にはなられましたけれど、なにしてる准教員時代が長かつたために、前後40年からの教育者生活をされながら、以前の恩給法では准教員は恩給年限の中へ加算されなかつたため、ついに恩給がつかなくなつたというやうな非常にお気の毒なご生涯であつたのであります。

さて先生のことをお話しするには、まず私が尋常の四年生まで学んだ自分の字（あざ）の学校のことから申さねばなりません。それは昔士族の住んでいたというただの民家でありまして、なかには障子が立つていて、今から考えると全く夢のようです。特に懐かしい思い出となるのは、冬になると教室の隅に大きな箱火鉢が持ち出されて、それには炭火が入るので、私はさほど遠くになつたものでも、お昼は家へ帰つて食べてお弁当に切り餅を持つてきたものです。それ

も生のままで持つてくるのです。そして3時限と4時限との間の休み時間になり、まずと、皆墨をすすって下手な字でめいめいの名を仮名で直にその生餅の上に書いたものです。そして第4時限の中ごろになると、めいめい例の大きな箱火鉢の上にかけられた金網の上にそれを乗せにいくのです。それを先生は机間巡視をさせながら、焼けたのから順に隅の方に寄せ、焼けないのは真ん中へ出すようにい、ちいち裏返しをされて、ちょうど4時限の鐘が鳴る頃には、ちゃんと皆がほかほかと焼きたての温かい餅が食べられるようになっていたものです。面白いでしょう。諸君のうちでこんな素朴な学校で習った人はないでしょう。

さてこの松井先生について未だに忘れられないことが一つあります。それは先生は時々大楠公の櫻井の駅の話をされたましたが、その度に先生は必ずお泣きになったものです。無論泣くとは申しても声を出してお泣きになったというのではありません。しかし子供ながらもじつと見ていると、まず先生の瞼を中心として眼の縁がほんのりと淡紅くなるのです。先生は色の白い方でありましたので、そういうことが子供ながらもはつきりとよくわかったものでした。眼の縁がほんのりと紅くなると、やがて一筋の光ったものが眼鏡の下から頬を伝って流れる……。それが34、5年後の今日でも、まるで昨日のこのようにはつきりと思い出されるのであります。すると先生は静かに真白のハンカチを出してメガネを取って

涙をお拭きになるのです。そうしてその時には必ず次のようなことをおっしゃったものでした。それは「これでも昔は二本差した身だから、だからどうしても他人事とは思えない。」と「諸君！尋常一、二年というような全く西も東もわからない鼻たれ小僧を相手に、涙を流して教えつつある先生がこの広い日本に果たして幾人あるでしょう。しかもそれは単なる青年期の情熱ではなくて、恐らく私の教わった頃の先生はすでに40代も半ばを越えておられたお年だったと思います。と申すのはその頃先生の頭髪はもう相当白くて、私たちが教わってから数年後にはもう職をお退きになりましたから……。私は自分が教師として今日まで歩んできたその最初のスタートが、この清純潔浄な武士的風格をもたれた松井先生によって開かれたことを思うごとに、密かに感涙に咽ぶのであります。（この時先生の眼またうるみを帯びる）

■石川唯一先生

次に忘れたいのは石川唯一先生です。ところがこの方もまた師範出身ではなく、資格は尋正でしたのですが、この方は非常に漢学の素養がおりであったようでもあります。この先生は昔の高等科1年生即ち現在の尋常5年の時に教わったのであります。もちろん子供の私どもに先生の漢文のご造詣のほどのわかるうはずはありません。しかし何でも、一度お宅へ伺った時のお話に、早稲田の支那文学に

来て、これを教えるのになかなか骨が折れるとおっしゃったことをいまだに覚えています。しかるにその「文選」というものは数ある支那の古典の中でも特に難しいものとして有名なことによっても、先生の漢文学における造詣が、今日の中等学校の漢文の先生程度でなかった事は明らかであります。先生はそこにご造詣からして、時々国語や歴史の時間に詩を教えてくださったものです。それがまた実に楽しみであって、私など喜んでこれを暗記したものです。後年私が大学では西洋哲学を学びながら、卒業後次第に東洋の方面へ心が向いてきたのは、もちろんその根本は西先生や福島先生の導きによること申すまでもありませんが、しかしその遠い種蒔きの1つは、この石川唯一先生によってなされたと思っても良いでしょう。

なおこの先生について私には1つの忘れたいことがあるのであります。それは私一個に関する事柄であります。それよつと申しにくいんですけど、しかしこういうことを話す機会も今後また何時あるうやもわかりませんが、この際ついでに申してみたいと思えます。それは先ほども申したように、私がこの先生にお習いしたの今の尋常5年、すなわちもとの高等1年の時のことでもあります。ところが私は先にも申したように、尋常科はみすばらしい字の学校で学んだのであります。高等科は半里ほど距たった郡内第一の学校であつたのです。

元来私の町は田舎としては珍しく富豪

の多い町でありまして、1つの町に多額納税議員の有資格者が数人もあるという町なんです。そこで相当な家庭の子供が多く、したがって同級生もなかなかよかったです。またその学校の高等科へはずいぶん遠くから生徒が集まってきたものでした。しかし田舎の小さな学校で首席だった生徒でも、一度その学校へくるとまず中位まで行けば良い方でした。そこで私の隣近所の者たちも、字の学校では1番でも町の学校行つて果たしてどの程度の成績をとるものと随分興味の種だつたらしいのです。さていよいよ行つてみると、なるほど田舎の学校と違つてなかなかよくできる者がたくさんおりました。しかし私にとって真に恐るべき競争相手と思われたのは結局1人しかいなかったのです。それは穂積圭吾君といつて、知多紡績の重役の息子で、家には当時50万円ほどの資産のある子でした。もつとも私も生家から申せば、生家の祖父はその穂積君のお父さんと一緒に知多紡績を興した重役仲間の1人、いやその専務取締役だつたのですから、その方から言えば必ずしも引け目を感じなくても良いわけですが、しかし何ぶんにも私のその育てられた養家は実に見る陰もない水呑百姓でありまして、穂積君の家などその敷居をまたぐこともできないほどの家なのです。

人々の間の噂となつていたらしいのです。近頃では小学生の席次などというものはほとんど問題にもなりません、私の子供の頃は非常な問題でありまして、成績の発表は今日の中等学校の入学試験の合格者発表のように公然と張り出されて、父兄の中にもわざわざ見に来るものがあるといった騒ぎでした。

ところがいよいよ成績発表の結果は私が1番で穂積君が2番でした。これが田舎から出て行つて町の学校で首席になつた最初で、同時にまた終わりだつたようです。ところがこれは私の叔父が当時その学校の校長だつたものですから、後年聞いたことですが、その時職員会議の席上、石川先生が成績が良い以上資産の多少やないしその出身校のいかに関係らず成績の順に従つて一番にしなればならぬと強硬に主張されたため、とうとう私が首席になることになつたそうです。

■正しいことは必ず通る

今から考えれば何でもないことのようにですが、しかし私はこの一事によつて、世の中というものは正しいことが必ず通るものであり、実力は必ずいつかは認められて最後の勝利を占めるものであるという、私の人生に対する根本信念の基礎を植え付けられたと思うのであります。そのために、このような私事にわたることとを申すのは如何かとも思つたのですけど、1つには今はなき石川先生に対する感謝の念とともに、将来教育者として起つ諸君に対しても、何らかの参考になる

かと思つてあえてお話しした次第であります。つまりその時もし私が一番にされていなかったとしたら、あるいは私の人生に対する僻みがある時に兆さなかつたかどうかして保証できましよう。上に申したように、地方的には相当な生家に生まれて育ちながら、人生に対してかつていちども僻みというものを抱いたことのないのは、もちろんちよつと類のないほど深く私を可愛がつてくれた養父の丹精によることは最も大きな原因であります。しかしまたその一部には人生のスタートにおいて正しさを身を以て示してくださつたこの石川先生のお陰によることも思はずにはいられません。では小学時代の話はこれぐらいにしまして、次には師範時代における先生についてお話しすることにしたましよう。（吉田栄一記）

（修身教授録第三巻昭和18年9月刊 同志同行社刊）

小学1、2年時の森信三先生のお話である。6、7歳児といえども大人の鑑識はできるのである。森信三先生は一流の大人には“芯”があり、“貫くもの”があるのだと学んだのだ。（二繁）

無武装の日本と世界（微言）

森信三

○今日全世界のうちで、我々日本民族ほど弱くてしかも強い立場に置かれている民族はないであろう。そして弱いとは現実面より言うことである。強いとは本質面より言うことである。

○これを他の言葉で言えば全武装を放棄していることが現実的には最も弱いとせ

られる面であるが、同時にそれが逆に本質的には最も強い面ともなりうるのである。

○我々日本民族は今や我らの置かれているこの至柔にして至剛なる意義に徹しなければならぬ立場に置かれている。

○世俗にも「赤子を斬るわけには行かぬ」という我らの現在置かれていた状況は、国際的には全く赤ん坊の如く無防備である。かつていかなる国が現在のわが国ほどに無防備たり得た国があるであろう。

○しかも我らはこれをもって自ら誇る資格のない事を忘れてはならぬ。何となればわれらの武装の全的放棄は必ずしも我々の民族のみの絶対自発であったとは言いがたいからである。

○ここにおいてか、今日我らの置かれていた国際的状況は、全く神意のしからしむるところというのほかない。神の間、何事を我らに悟らしめんと欲し給うか。この公案を説くことこそ、今日我々の民族に課せられたる最大公案といつてよい。

○今日我らに与えられている国際的状況を神意に基づくと言え、人々のうちには嘲笑して、「いや、それはただ世界が米ソという二大勢力圏に分裂対立している結果にすぎない」という人もあるであろう。

○然り、現実により見れば、まさしくその通りである。しかし我らの眼を以てみれば、全世界がかく二大勢力圏に分裂対立している事、またこの間にわが国が、全くの無武装のままに介在せしめられて

いるという奇跡的に現実の上に、我らには明らかなる神意を見んとするものである。○然り！まことにこれは奇跡的現実というのほかない現況である。何となれば、世界史上未だかつてかくの如き事態の発生したことは絶無だからである。即ち全世界が二大勢力圏に分裂対立した事はかつてなく、いわんやその間に我らのごとく全的無武装の国のあつたためしはないからである。

○見よ！隣国の朝鮮すら分裂しながらささやかなる武装を持つていてはなないか。その分裂は世界的分裂の一反映であり、そのささやかなる武装も現下の世界情勢の苦悩を象徴しているといつてよい。

○しかるにその文化において、その人員において、朝鮮よりはるかに進んでいる日本が、今日世界的対立勢力の間に、全くの無武装で介在しているという奇跡的事実よ！ここに神意を見ずしてどこに神意を見得るであろう。

○しからばそこに宿されている神意の内容はいかなるものであろうか。一言で言え、至柔なるもののみがもつ至剛の真理でなくて何であろう。この真理は従来個人の上には繰り返し検証せられてきたことであるが、今や神はわれらの民族を通して、これを民族主体の立場において検証せしめんとし給うのであろう。

○今後世界史の進行過程において、この無武装なる最弱民族の運命がいかになりゆくか、これは全世界史上最大奇跡の現成と言つて良い。いかなる人類の世界的関心も、ある意味ではこれに勝るものは

ないと言えよう。○嗚呼、日本民族よ！汝の頭上に課せられたつあるこの世界史上空前の奇跡を解し得たりや否や。我らの民族が、今日世界に向かつて叫ぶべきは単なる軍事基地設置反対ではなくして、全世界の武装放棄でなければならぬ。神の眼より見て疑似講和ならざる真の講和は、正に全世界の武装放棄を前提としてのみ行われることを知らねばならぬ。「開頭」昭和25年6月号通巻39号)

あとがきに替えて

戦後70余年を経て森信三先生のお考えとは正逆の世界が現実となっている。そればかりか「核兵器」の現勢は、これを減らすよりも、より小さく高度に改良が進められつつある。果たして人類はどこへいくのか？森信三先生の戦後の認識とは大幅に変化した日本は、普通の国に変化を遂げつつある。これはひとり日本自身のせいではなく、近隣諸国をはじめとする世界の情勢に鑑みてとつた施策であつたと思う。(28日二繁)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn